
ウルトラマンブレイブ～魔法少女との遭遇～

ハナト・ブレイブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンブレイブ〜魔法少女との遭遇〜

【Nコード】

N8008V

【作者名】

ハナト・ブレイブ

【あらすじ】

それは、ある日突然起こった。

空から降ってきた少年、『ヒビノ・ユウキ』

その少年と出会ったのは、少々残忍な面を持ち合わせた少女、『佐倉杏子』だった。

そんな二人の出会いが、何を生み出していくのか……？

ユウキの本当の姿とは……？

ウルトラマンブレイブ〜魔道師との遭遇〜

続編、
今ここに！

プロローグ（前書き）

ついに始まりました、ウルトラマンブレイブ続編！
魔道師との遭遇を読んでない方でも平気ですので、どうぞゆくりと
お楽しみ下さい。
では、どうぞ！

プロローグ

とある世界の星、地球

その星に、一筋の光が落下した……。

その光はどこかのボロボロになった協会の近くに墜落した。

驚いて建物から出てきた赤毛の少女は、手に持っていたアイスキヤンデーの棒を放り投げ、光が墜落してできたクレーターに駆け寄る。

その中心に、茶色い民族衣装の様な物を着た同い年ぐらいの少年が倒れていた。

一瞬警戒し、身構えた少女だったが、ふと見えた少年の横顔があまりにも優しく、あまりにも温かく感じた為、さらに近寄って抱え起こす。

「おいっ、おい、大丈夫か？」

やや荒っぽい口調で揺さぶる少女。

やがて少年の眉がかすかに動き、少年がゆっくりと目を開く。

「ん……？　ここは……？」

茶髪の少しツンツンした髪の毛の少年は薄っすらと瞼を開け、辺りを見回した後少女を見る。

「君が、助けてくれたの……？」

「あ、いや……」

助けた、と言えるほど大した事はしていない為、少女は口ごもる。
それでも少年は勢い良く立ち上がり、少女に頭を下げる。

「ありがとうございます！」

「あ、お、おう……」

男っぽい返事をする少女。その少女に、少年は満面の笑みを見せる。
それは少女が今まで感じた事の無かった、暖かな温もりを含んでいた。最も、少年もその温もりを別の人物から貰ったのだが。
その後少年は何も迷う事無く、少女に自分の名前を言った。

「ヒビノ・ユウキです！ よろしくお願いします！」

「あ、ああ。佐倉杏子^{さくら きょうこ}だ。よろしく……ッ!？」

少年に釣られて自己紹介をする少女——杏子——。何の疑問も抱かず自己紹介をしてしまう自分に驚きつつも、目の前の少年を改めてみる。

小首を傾げる姿は小動物を思わせるが、それでいて目の奥には力強い光を灯している。

その後プイツと目を逸らし、ただ俯いていた。

これから始まるのは、そんな少年、『ヒビノ・ユウキ』と、『佐倉杏子』の物語。

果たして、二人は今後どの様に物語を展開していくのか……？

ウルトラマンブレイブ〜魔法少女との遭遇〜
プロローグ

始まります……。

プロローグ（後書き）

次回より、本編スタートです！

第1話 日々の勇気（前書き）

ようやく第1話です！

サブタイトルを考えるのに時間がかかったことは内緒です……。

第1話 日々の勇氣

「んで、あんたナニモンだ？」

「ナニモンって、ヒビノ・ユウキだけど？」

赤毛の少女、『佐倉杏子』は頭を抱えた。目の前に立っている穏やかな笑顔を見せる少年、『ヒビノ・ユウキ』。

見た目は自分とあまり変わらない年齢に見えるが、そもそも空から降ってきた時点で普通じゃない事は確かだった。

杏子は睨む様にしてユウキの方を見る。対するユウキは小動物の様に可愛らしく首を傾げ、杏子が次の言葉を言うのを待っている。

「だ・か・ら！ 何であんたは空から降ってきたのかって聞いてんの！」

「ああゝそれ！ えっと……」

ユウキは手をポンと叩き、下唇に一指し指を当てて記憶を遡る。その間にも、杏子は警戒を解く事を止めない。いざとなったら、自分の力でユウキを潰そうと考えているのだ。

「……あれ、何でだっけ？」

「おい！」

全く覚えが無い、と物語る様なユウキの表情と言葉に、杏子が素早くツツコミを入れる。

あはは〜と言いながら後頭部を搔くユウキに、杏子は口の端を引き攣らせる。

(どうも調子が狂うな、こいつと居ると……)

ウルトラマンブレイブ〜魔法少女との遭遇〜
第1話 日々の勇気

とりあえず近くの寂れた協会にユウキを引き連れ、中でゆっくり話を聞く事にした。ユウキは物珍しそうに辺りを眺めては「うわぁ」とか「おお」とか興奮した声を上げる。

杏子は教団の上に置いてあるアンパンを一個、ユウキに向かって投げる。ユウキはそれを受け取り、丁寧にお辞儀をして日本独特の食前の挨拶をしてからアンパンを頬張った。

「んで？ あんたどこから来たの？」

杏子もアンパンを頬張りながら尋ねる。警戒してというよりも、純粹に目の前の少年に興味を持ち始めていた。

「ん？ 僕は光の国のウルトラ戦士、ウルトラマンブレイブ！ M78星雲、ウルトラの星出身だよ」

フフンと鼻を鳴らして得意げに答えるユウキ。それに対し杏子は、ポカーンと口を空けて啞然としていた。

「光の国？ ウルトラン？」

「えっ！？ もしかして……知らないの？」

あまりにも不自然な単語を杏子が拾い、ユウキに鸚鵡返しする。対するユウキも驚き、まばたきを何度もする。するとユウキの質問に杏子は深く頷く。

ユウキは誰が見ても『ショック！』と分かる表情をした後、徐々にその体がデフォルメされた様に小さくなっていく。その目には、若干……いや大分涙が溜まっていた。それを見て慌てた杏子は咄嗟に付け加える。

「あつ、でも聞いた事は有る様な、無い様な、無い様な………無い様な………」

弁解し様とした杏子だが、さすがに知らない事を知っていると偽れるほど彼女は器用ではなく、むしろ墓穴をドリルを使ったかのごとく掘っていく。

申し訳なさそうに杏子がユウキの方を見ると、ユウキは平然とアンパンを貪っていた。

「あ、コレ美味しい！」

「つて人の話し聞けよ！」

「ぶぎやふっ！」

人の必死の弁解も聞かずアンパンの感想を述べるユウキに、杏子はどこから取り出したハリセンでユウキを引っ叩く。

頭を抑えて唸るユウキと、激しく肩を上下させて呼吸を荒くする杏子。

ナニコレシユール……。

そんなこんなで会話のバッティング練習が続いた後、ようやくユウキがウルトラマン、ひいては光の国について語り始めた。

僕等『ウルトラ一族』と呼ばれる種族は、『M78星雲・光の国』と呼ばれる世界の出身なんだ。

本当は君達と同じ人間の姿だったんだけど、ちょっとした事から超人としての力と肉体を得てしまった。

それは決して望んだ力ではなかった。けど、当時の人達はこう考えた。

『力を得たという事は、果たすべき何かがある筈だ』って。

だから僕等ウルトラマンは、日夜様々な星で平和を守っているんだ。

「それで僕はついこの間までこことは違う、多分平行世界の地球を守っていたんだ。」

「でも全ての仕事が終わって、光の国へ一度帰ったんだ。それで新しい任務を得て、出勤したんだけど……。」

「？　どした？」

「ああゝ！！　思い出した！　それだよそれ！　任務の途中で僕ワームホールに飲み込まれちゃったんだ！　それで気が付いたらここに……なるほどゝ！」

「何やら一人で解決した事に喜んでいるユウキと、それを詰まらなさそうに見つめる杏子。」

「ユウキもその後軽く説明をしたが、杏子は無関心だった。」

「んだよそれ。くっだらねえ」

「な！？　くだらないって！」

「さつきから黙って聞いてりゃ何だあ？　力を人の為にだとか何とかって……あんだ、とんだ偽善者だな」

その見下す様な言葉に、さすがのユウキも怒りを隠せなかった。
震える拳を握り締め、声を低くして杏子に言い放つ。

「……………どういう意味……………？」

「力つてのは自分が幸せになる為に使うもんだ。誰かの為とか、そんなくっだらねえ事で使うとか……………夢物語も良いとこだぜ」

そこまで言い終わると、ヤレヤレとでも言いたげな表情で首を振る杏子。

チラッとユウキの方を見ると、怒りを露に

してなかった。
むしろ、何かを考えている様だった。

「杏子ちゃん、もしかして……昔何かあったの？」

「ッ！ な、なんだよいきなり……」

ユウキの唐突な質問に、杏子は動揺を隠せずそっぽを向いてしまう。ユウキはその頬を両手で抑え、自分の方に向けさせる。すると杏子の目の前に、ユウキの顔がドアップで映る。普段男子と接する事の無い彼女の顔は、見る見るうちに赤くなっていく。

「……うん、やっぱり……。凄く悲しい目をしているよ？ 寂しさを無理やり押し留めている様な……そんな目……」

「う、うつせえ！ あんたには関係ねえだろ！」

ユウキの言った言葉に一瞬肩を大きく跳ねさせ、すぐにその手を払う杏子。

すると突然、周囲の空間が歪む。

「な、なにこれ！？ 結界！？」

「ちっ、この気配……魔女か……」

不気味な空間の中に、二人は閉じ込められた。

絵に描いた様な不思議な空間が広がり、子供の落書きが実体化した様な生物達が動き回っている。

ユウキは何かあっても良い様に、左腕に青い異形のブレスレットを出現させる。すると杏子は赤い雫の様な宝石を取り出し、瞬時に姿が変わる。

真っ赤な袖なしの服に、ヒラヒラとしたスカート。その手には、十字架を模した槍が握られていた。

「杏子ちゃん、それって……?」

「それは後回しだ。あんた、下がってな」

ユウキの前に出て、落書きの様な生物達を高速で切り落としていく杏子。その槍捌きは、ウルトラマンであるユウキでさえ息を呑むほどだった。

あっという間に周囲の落書き生物を全滅させ、どんどん奥へと進んでいく。

するとマンションのロビーが錆びれた様な場所に出る。その中央に、巨大な黒い怪物が立っていた。

「な、何あれ！？ 怪獣！？」

「うんにゃ、アレが『魔女』だ。あたし達魔法少女の獲物」

「魔女？ 魔法少女？」

先程の杏子の様に、今度はユウキが首を傾げる。杏子はそれを無視し、槍を握りなおして突っ込んでいった。魔女の放った光弾を見事に避けて怪物に接近する。

ユウキもそれを追いかけながら、ブレスレットの中央にあるサークルを勢い良く回転させ、そのまま左腕を前に突き出す。

「ブレイブ！！」

と叫ぶが、何も起こらない。

驚いて何度もブレスを叩くユウキだが、全く反応は起きなかった。

「ブレイブに、なれない……？」

ユウキは驚きに声を漏らし、その場で立ち止まってしまふ。
すると先程の叫びでユウキに気付いた魔女が、ゆっくりとユウキに迫る。

「おいっ！」

「ッ！」

杏子が咄嗟にユウキに声をかけ、ユウキは魔女に気付いた。が、すでに魔女の腕がユウキに振り下ろされていた。杏子は間に合わないと思いながらも、ユウキに向かって走り出した。

魔女の手が迫る中、ユウキは咄嗟に先程とは逆回転でサークルを回して、右手を前に突き出す。

するとユウキの右手から光の刃が放たれ、魔女の腕に直撃する。痛みには魔女は手を引っ込め、ユウキはすぐに杏子と合流する。

「あんだ、今のは……？」

「お互いに、その説明は後回しだね。今は……」

二人のすぐ横で、怪物が悶えている。それに止めを刺すため、杏子が魔女に向かって突っ走る。それを援護する様に、ユウキが右手から刃を連射する。

ユウキの放った刃が魔女の光弾を全て打ち落とし、止めに槍を大きく振りかぶった杏子が魔女を突き刺した。すると魔女が爆発し、徐々に空間が戻っていった。

魔女を倒した杏子とユウキは、互いに互いの説明の為一度協会に戻っていた。

そしてユウキが話し始めようとしたそのとき、二人の下に一匹の白い、猫の様な生物が現れた。その三角形の耳から、長い別の耳が生えている。

『杏子、その子は誰だい？』

「喋った!？」

白い生物が喋った事に、ユウキは驚いて素っ頓狂な声を上げる。

「んああ、まああたし達の敵じゃ無い事は確かだな。んであんた「ユウキね」……ユウキ、こっちは『キユウベえ』だ。あたしに魔法少女の力をくれた」

『よろしくっ！』

杏子がパイプの役割を果たし、互いに互いの事を教える。

そしてユウキの名前を聞いたキユウベえは、ユウキに友好的に挨拶した。

対するユウキは、『キユウベえ』という名前が引つ掛かっていた。

（キユウベえ……どこかで聞いた事有る様な……？）

考え込むユウキを見ながら、杏子とキユウベえが不思議そうに首を傾げていた……。

第1話 日々の勇気（後書き）

次回、ウルトラマンブレイブと魔法少女との遭遇！

杏子

「あんたさあ、食物連鎖とか、弱肉強食って知ってるか？」

ユウキ

「人の命より、グリーンフシードを優先するな！」

EXエレキング

「キイイイイイイ！！！」

ユウキ

「僕はあの子を助ける……！」

杏子

「あれが、あいつの本当の姿……」

ユウキ

「ブレイブ！」

次回、【命の重み】

お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8008v/>

ウルトラマンブレイブ～魔法少女との遭遇～

2011年10月8日17時22分発行